



■ 活発化する中国との国際交流

社会科学院考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所の国際交流事業はここ数年、多方面に展開し、ことに中国とは、国家だけでなく、各省の研究所とも共同研究をおこなっています。その先駆けになった社会科学院考古研究所との交流事業は、1995年に結んだ「友好共同研究議定書」が今年6月に5年間の期限を迎えたので、8月21日に町田章所長が北京の考古研究所に赴き、新議定書に署名、新たな共同発掘について協議しました。

今年から始まる共同発掘の場所は、唐代長安城の太液池です。太液池は長安城の東北、龍首原上に營まれた大明宮にあります。規模は東西530m、南北330mあまり。蓬萊山など中嶋があり、池の周囲には多数の宮殿閣樓があったといいます。

太液は人の精氣を司る気液のこと、これが満ちた池の意味でしょう。太液池はもと漢長安城の建章宮の北にありました。唐代の池はその名前を襲名したものです。漢の太液池には蓬萊山、方丈山、瀛洲の三山があり、亀魚を象るものがあったといい、実際に、太液池推定地では史料の魚にあたる石製魚も見つかっています。



協定署名後の記念撮影 考古研究所

ところで、唐の長安城には太液池の他に西内苑、禁苑など苑と池（宮）があり、対する平城宮にも松林苑、南苑と西池宮があつて、両者の関わりを示唆するようです。苑池は都城にとって重要な施設であり、太液池の調査は、日中都城制の解明に大きな手懸かりになると思います。

遼寧省文物考古研究所との共同研究

1996年に、奈文研は、遼寧省文物考古研究所と「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究—」のテーマで、共同研究の協定を結びました。以来、北票市に所在するラマトン遺跡から出土した鉄製品・金銅製品などを中心に共同研究を進め、観察・実測・写真撮影と保存処理をおこなっています。

ラマトン遺跡は、大凌河北岸の丘陵地にある3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地です。1993年からの5次にわたる発掘調査で、計420基の三燕時代の墓地が見つかりました。鉄・金銅・青銅製品など多彩で豊富な副葬品が出土していますが、中でも馬具は、4～5世紀の日本や韓国の古墳から出土する馬具の源流と考えられるものです。

現在、協定の最終年度にあたって、共同研究の成果を取り入れた図録等の作成に入っていますが、来



遼寧省文物考古研究所における実測風景

年度からは、ラマトン遺跡からさらに遼寧省西地区の三燕都城関連遺跡出土品へとテーマを発展させ、新たな共同研究を開始します。新しい研究テーマに即して、7月1日にあらためて両研究所間の協定書を調印しました。

漢長安城桂宮出土遺物の調査

泰文研と中国社会科学院考古研究所は、漢長安城桂宮の共同発掘調査の成果として、報告書作成作業を進めつつあります。その考察部分を検討するため、平城宮跡発掘調査部から2名が、6月17日より7月6日まで、考古研究所西安研究室で桂宮出土遺物の調査をおこないました。今回の調査では、中国側の積極的な協力により、この他に、西安市文物保護考古所、陝西省陽陵博物館、陝西省歴史博物館、咸陽博物館、茂陵博物館で同時代の関連資料の観察もおこないました。

おかげで貴重な成果を得たのですが、それに加え、中国側の若手研究者とこの成果について、大いに議論する機会を持つことができました。学問の伝統が全く異なる両国の研究者による議論は尽きることなく続き、互いに大きな刺激となりました。この刺激が、学術交流の成果として、いずれ大きな実を結ぶことを予感させてくれます。



桂宮出土遺物調査風景



興福寺中金堂発掘現場の全景（東南より）

められた部分の調査から、現在基壇周囲で検出している凝灰岩切石や玉石敷きは、五間階段への改造に伴う可能性が強く、創建期は基壇の外にバラスが敷かれていたであろうことなどが判明しました。また、東西の階段は、創建期には一間幅であったことが明らかになり、中金堂創建の時期の議論にも一石を投じることになりそうです。

五間階段への改造の時期の問題など、課題も多く



南面階段（創建期）

抱えていますが、一つ一つ解決していくたいと思っています。

長屋王邸の調査（平城第329次）

今年の夏現場班の発掘調査は、長屋王邸の調査から始まりました。調査地は長屋王邸の内郭西南部分に相当します。6月26日から7月12日まで210 m²の発掘調査をおこない、大型の掘立柱穴5基、掘立柱南北堀3列、自然流路などを検出しました。大型

興福寺中金堂の調査（平城第325次）

すでに調査終了予定を大幅に超過していますが、着々と成果があがりつつあります。

南面階段は前号で紹介した通りの変遷が確実になりました。そして、五間階段に改造されたときに埋

掘立柱穴は、調査区の東端で南北方向に5基並んでいます。過去に東側で行った調査では、東西棟の掘立柱建物の柱穴を検出しており、それらと一連のものと考えられます。これまでこの建

物は、北に位置する長屋王邸正殿との関係から桁行9間の建物と予想されていましたが、今回の調査で桁行7間であることが確定しました。

興福寺旧一乗院の調査（平城第330次）



興福寺旧一乗院の発掘現場

奈良地方裁判所庁舎建て替えに伴う発掘調査です。調査区は北側の試掘調査区と南側の本調査区に分かれ、試掘調査区の面積が165m²、本調査区は583m²です。試掘調査区は6月18日から7月17日まで調査を行い、土坑6基、溝2条、厚さ1m以上に及ぶかわらけの堆積層を確認しました。この堆積層は、中世に多量のかわらけをこの場所に廃棄、集積することによって形成されたと考えられます。

本調査区は7月25日から調査を開始しました。これまでに池や築山など、庭園に関連する遺構を確認しています。池には上層と下層があり、築山も土の違いや遺物の時代から、増築がおこなわれたようです。池と築山の関係など、庭園全体の変遷については、今後の調査で整理していく必要があります。

（平城宮跡発掘調査部）



長屋王邸検出遺構

藤原京左京七条一坊の調査（飛鳥藤原第115次）

橿原市市営住宅の建て替え工事にともなう事前調査です。敷地内に土置き場を確保する関係上、東側の約2000m²と西側の約1000m²の2回に分けて調査しています。4月3日に開始した東側の調査は、6月30日に現地説明会をおこない、7月3日に終了しました。9月現在、ひきつづいて西側の調査を実施しています。

調査地は、藤原京の左京七条一坊西南坪にあたります。この坪は、西が朱雀大路、南が七条大路に面し、藤原宮の正門である朱雀門から約300mという、宮にほど近いところです。

東側調査区の南西部では、坪のほぼ中軸線上の位置に、東西8間（約21m）、南北2間（約6m）の大型の掘立柱建物が建っていたことを確認しました。したがって、この時期には、少なくとも1町（約133m四方）を占める大きな敷地であったことが確



藤原京左京七条一坊の大型建物

実です。また、北東部ではL字形の溝を2条検出していますが、これが敷地内を方形に区画する施設の一部であるとすれば、中央部に1町分の内郭をもつ、4町（約265m四方）の敷地となる可能性も想定されます。

なお、大型建物が建っていたのは、藤原宮期（694～710）の後半と考えますが、それに先立つ藤原宮期前半や、7世紀中頃～後半の掘立柱建物の跡もいくつか見つかっています。

調査地は、南東から北西方向に向かう谷地形にあたり、大型建物の北の池状遺構からは、南岸近くに堆積した木屑層を中心に、多量の木簡が出土しました。木簡の内容については、次項をごらんいただきたいと思いますが、ここに中務省ないしその関連施設があり、大型建物はその一部を構成する可能性が高いと思われます。

藤原京左京七条一坊出土の木簡

池状遺構の木屑層などから、約1200点の木簡が出土しました。削り屑を含む木屑層を持ち帰って洗浄中ですので、確言はできませんが、最終的な出土点数は数千点にのぼり、藤原宮・京城において過去最大の出土点数になる見込みです。

したがって、木簡の全貌については今後の整理を待たねばなりませんが、現在のところ、大宝初年の中務省の仕事に関わる木簡群ではないかと考えています。中務省とは、律令国家の二官八省の一つで、天皇の秘書官として詔勅を作成したり、後宮関係の仕事をおこなった役所です。以下に、出土木簡の特徴を述べておきます。



藤原京左京七条一坊出土の木簡

① 各役所が中務省へ宛てて出した、物資を宮から運び出すための許可を申請した木簡。許可を申請した役所として、内蔵寮（天皇の宝物や日常用品を調達管理する役所）や画工司（宮中の絵画を担当する役所）がみえ、木簡には物資の数量や出入りの門名、担当者名などが書かれています。

② 皇太妃宮職（阿陪内親王の家政を掌る役所。阿陪は後の元明天皇）や、宮内省（天皇や皇室関係の庶務を担当）からの木簡。断片のためはつきりしませんが、①と同様の内容かもしれません。

③ 御名部親王宮（長屋王の母。阿陪と姉妹）、石川宮（某親王家）、県犬義三千代（藤原不比等の妻。光明皇后の母）など皇族・貴族との物品のやりとりを示す木簡。

その他、役人の位階昇進や勤務評定の木簡、炊事役の逃亡を記す木簡、難波津の歌を下の句まで記す珍しい木簡などが出土しました。

以上の木簡は、基本的には大宝元年（701）施行の大宝律令の制度によるものです。記載の元号も大宝元年と大宝2年に限られています。ちょうど大宝律令が施行された直後の役所の書類が、一括して見つかったことになります。

しかし、ふつう宮の内にあるはずの役所がなぜ宮の外にあったのでしょうか。藤原宮の大改築のため、一時、宮外に移転した可能性などが考えられます、詳細は不明です。今回の木簡の発見は、古代の都城制を考えるうえで、新たな課題を生じさせたといえるでしょう。

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第116次）

石神遺跡は、齐明天皇の時代（655～661）に、異国や辺境の民への饗宴をおこなったり、客館として機能した場所と考えられています。現在、飛鳥資料館に展示している石人像と須弥山石は、明治時代にここから掘り出されたものです。



石神遺跡の調査風景

奈文研では、この遺跡を1981年から継続的に調査してきました。今回の調査は14回めにあたり、昨年度調査した東側の隣接地を約500m²発掘しています。これまでではもっとも北に位置し、遺跡の北限を解明することが期待されます。

石神遺跡は、調査の難度という点では、飛鳥でも有数の遺跡です。遺構が複雑で重複が多いうえに、傾斜地に大規模な造営を何度も繰り返しているため、何層もの整地土が各時期ごとの遺構を覆い隠し、寸断しているのです。

そこで、遺構を検出しては整地土を一層除去し、また遺構を探す、という作業が必要となります。当然、整地土を除去できるのは遺構がない部分に限られますが、こうした作業を経て、少しづつ遺跡の状況が明らかになってきました。

昨年度の調査で石神遺跡の北限と考えた石組大溝は、今回の調査区を横断してさらに東へのびています。幅2.4m、深さ0.7m以上という立派なもので、これが北の端を区画する溝である可能性が高まりました。また、それとセットになって遺跡の北限を構

成する東西方向の掘立柱塀も、同様に東へつづいていきます。ただし、この石組大溝はある時期に埋められて、底に石を敷き詰めた幅0.9m、深さ0.3mほどの浅い石組溝に造り替えられていることが、あらたに判明しました。

北限に近い関係からか、建物の密度はさほど高くありません。調査区東南部で、大型の掘立柱建物1棟を確認している程度です。一方、遺物は大量に出土しており、とくに藤原宮跡の溝からは膨大な量の土器が見つかりました。

発掘調査はまもなく佳境にはいり、9月後半から順次、遺構写真の撮影や平面実測などをおこなっていく予定です。
(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

文化遺産研究部の調査研究概要

年度計画にもとづく調査研究も、4・5月の準備期間を経て、6月以降よいよ本格的に稼動し始めました。とくに7月に入ってからは、町並み調査や文書調査、遺跡整備の調査など、現地に出かけての調査が多くなっています。

建造物研究室では、醍醐寺、唐招提寺、東大寺、元興寺など古代建築の調査をはじめ、高山市の町並み調査や文化財建造物の保存修復に関する研究など、活動の場面は多岐にわたります。またこれに併せて、文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿院復元の事業に、専門的・技術的な立場から援助するという大きな仕事があります。ただし、本年度からは独立行政法人化に伴って、事業主体である文化庁などの要請に応じて助言し援助するという立場に変わっていますので、昨年までとはいささか異なる戸惑いもあります。



北海道常呂遺跡の整備状況

歴史研究室では、7月中旬に東大史料編纂所と合同で薬師寺の文書調査をおこない、7月下旬には石山寺の依頼による文書調査に参加しました。石山寺では、最近その所蔵が再確認された「薫聖教（においのしょうぎょう）」13巻に関する記者発表が26日におこなわれ、その準備に協力しました。また8月には、東大寺の聖教文書類の調査をおこない、文化庁の醍醐寺の聖教調査に参加しました。その他、興福寺文書や北浦定政「松の落ち葉」の調査や写真撮影なども継続して実施しています。

遺跡研究室では、全国各地で整備されている史跡・遺跡の中から、より大規模なものを120箇所程度選び、その整備・活用・管理の状況を調査研究する計画を持っています。初年度に当たる今年は、まず対象とする遺跡の選び出しと調査項目などの整理をおこない、現地調査は北海道と東北地方を計画しています。来年度以降、順次地域を広げていく予定です。また、古代庭園に関する調査研究も重要な課題です。今年度は、日本庭園の源流ともいえる古墳時代以前の「流れ」に関する遺跡や遺構を対象にした研究会の開催を計画しています。これらに併せて、発掘調査で確認された「庭園」遺跡のデータ・ベースを作成し、奈文研のHPで公開していく予定です。

(文化遺産研究部)

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修「一般課程」

今年の「一般研修」は、例年よりも10日ほど開始を早め、6月12日から7月17日の日程で実施しました。考古学調査の経験が十分でない埋蔵文化財担当職員に対する研修であり、本州・四国・九州から総勢20名の研修生が参加しました。考古学の方針論、各時代考古学の概説、文化財及び文化財担当者の法的基盤等に関する基礎知識の習得のほか、最も基本的な考古学遺物の観察・実測の習得に力点を置いて、例年よりも多くの時間を割き、個人指導も採り入れました。

研修生の評判は概ねよかったですですが、とくに好評だったのは、遺物実測実習と臨地講義・飛鳥藤原地区の遺跡見学です。一方、今後の研修に生かすべきいろいろな要望もありましたが、中でも、彼らが

帰ったあと従事しなければならない発掘調査に関する実地研修を望む声が多くあります。例年出される要望であり、関係者はそろそろ対応を考えねばならない時期にきていると認識しています。

発掘技術者研修「保存科学課程」

5月22日より6月6日の16日間にわたり、保存科学課程の研修をおこないました。参加者は、青森県から鹿児島県まで総勢13名です。保存処理の担当に抜擢された方、日頃の発掘調査業務に保存科学の知識を生かしたい方、保存科学全般について概略を学びたい方など、参加の動機は様々です。

研修内容は、保存科学の基礎から実際の材質・構造調査、保存処理、保管環境、現場における応急処置を含むフィールドワークです。この現地実習は平城宮跡発掘調査部の協力を得て、興福寺中金堂の発掘調査現場においておこなうことができました。また、保存科学における写真記録の重要性を理解して



発掘現場での実習風景

もらうために、写真室の協力を得て、写真撮影実習も併せておこないました。

2週間という限られた短い期間の中では、取り扱う内容が多岐にわたることから、スケジュール的にもかなりハードな面があります。しかし、保存科学についての講義・実習を一通り体験することで、発掘現場での応急処置や遺物の取り上げ方、保存処理の概要について理解が深まり、基本的な技術の習得がなされたものと思われます。研修生からは、発掘調査における保存科学の果たす役割や保存処理の重要性に対して認識が新たになった、これまで手を出せないでいた遺物の保存処理を自前でおこなう、あるいは自前でできなくとも外注する際の留意点を整理し、仕様書を作成することに大きな一歩を踏み出

せたとの声が聞かれました。本研修は一応の成果をあげることができたものと思われます。

研修終了後、各々の任地に戻った研修生からは、遺物・遺構の保存について、それそれが抱える問題に関する問い合わせを受けたりしています。また、研修生間の情報交換も頻繁におこなわれているようです。研修生が、それぞれ自分のできることから動き出している状況を見て、本研修を担当した者としての安堵と喜びを感じている次第です。

(埋蔵文化財センター)

博物館実習生の受け入れ

昨年度からおこなっている博物館実習生の受け入れも2年目をむかえました。今年度は9月3日(月)から7日(金)までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。



博物館実習風景

実習生はそれぞれ奈良女子大学から2名、帝塚山大学から4名、滋賀県立大学と広島大学から各1名の計8名と昨年度の5名に比べると、少し増加しています。徐々にではありますが、当館が博物館実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されつつあるのでしょうか。

実習は、展示品貸借の実務、展覧会の実施について、博物館における展示解説、展示解説とマルチメディア、建築史概説と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品貸借の実務」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調

査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

「建築史概説」では、実習生の全員が建築学とはまったく関連のない学部に所属していることから、まず飛鳥時代における伽藍配置の推移を説明し、山田寺金堂復原模型を用いて飛鳥時代建築における細部の様式および特徴、部材の名称、奈良時代建築との違いなど簡単に講義しました。これをもとにして、演習では建物がどのように組み上がっているのかを自分の目で確かめてもらうために、復原された山田寺東回廊の展示部分のスケッチをおこないました。このような経験は大学ではほとんどないらしく、てこずる実習生もいました。

今年度の博物館実習が実習生にとって有益なものとなったかは現段階ではわかりません。しかし、少なくとも飛鳥時代に興味をもってもらうことはできたように思います。実習生の受け入れは、来年度も引き続きおこなわれます。はたして、次回は実習生が何人来るのでしょうか。
(飛鳥資料館)

研究会の開催

古代瓦研究会第5回シンポジウム

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、日本最古の寺院である飛鳥寺（588年創建）の瓦を皮切りに、古代の瓦を製作技法の面から見直そうという試みをつづけています。1998年以降、それにわるる4回のシンポジウムを奈文研で開催ましたが、6月23・24日の両日には、会場をはじめて千葉大学に移し、山田寺式軒瓦の東国への展開をテーマに、研究報告と討議



シンポジウム会場全景

をおこないました。

会場には、各地の寺院出土瓦を持ち寄っていただき、実物を前にして活発な意見が交わされました。こうした積み重ねにより、従来、文様に偏りがちであった瓦研究に、新たな局面を切り聞くことを期待しています。あわせて、開催にあたりご協力いただいた関係者・関係機関にあつく御礼申し上げます。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

研究室紹介

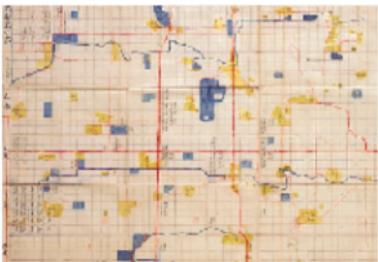
歴史研究室（文化遺産研究部）

奈文研発足当初に、南都諸寺社の文献史料部門、考古部門の調査研究を目的に設置された歴史研究室は、考古部門が1964年に分離して以降、定員1名と併任数名の体制で、南都の諸大寺や大社が所蔵する書跡資料の調査、研究を継続してきました。

そしてこのたび、奈文研の独立行政法人化に伴い、新しく設置された文化遺産研究部の1研究室（定員2名）となり、建造物研究室、遺跡研究室とともに、文化遺産についての総合的な調査研究をおこなうこととなりました。

世界遺産条約の文化遺産の定義には、書跡資料の類は含まれていませんが、我が国には、世界でも稀に古くからの書跡資料が数多く遺存しています。そこに、文化的的財産としての文化遺産を、よりトータルにとらえる調査研究体制ができたことは大きな意義があるのではないでしょうか。

歴史研究室は、歴史資料を主たる調査研究対象としておりますが、そのなかでも文字が書かれている資料を中心に、従来から継続的に調査してきました。南都、すなわち奈良には、東大寺をはじめ数多くの古くからの大寺があります。そこに所蔵されている



北浦定政関係資料(大和國坪割細見図 天理市北部付近)

古文書、古記録、経巻、聖教などの書跡資料の量は歴史研究室では、それらの書跡資料について、現在寺院が所蔵されています現状をふまえて、整理し、番号を付け、ラベルを貼り、調書をとり、写真撮影する調査を行っています。そして、作成してきたちよう調書や、写真の焼き付けを使って、その成果として管理にも研究にも役立つ目録を作ったり、資料紹介を行ったりしています。調書の内容を、データベース化する情報処理の作業も行っています。

調査方法は同じでも、調査をしている寺院は数多くあり、それぞれの寺院について、抱えている課題は違います。たとえば、興福寺では活字本の目録の第3冊目刊行、薬師寺では入力しているデータベースの整備公開、東大寺では国宝にまだ指定されていない文書の整理などが、現在取り組んでいる課題です。調査は、南都以外にも、依頼を受けて京都、滋賀などに出かけることもあります。

研究テーマとしては、資料に即した研究を目指して、室員が古文書の用紙の問題や、平城京や寺院の絵図についての研究などをおこなっています。

また奈文研には、1992年に子孫の方から、幕末の都城陵墓の研究者である北浦定政関係の資料が寄贈されました。定政は、平城京条坊復元図を最初に作り上げた人ですが、彼が条里や条坊を実地に踏査したときの調査日誌（野帳）や復元図などが含まれており、それら貴重な資料を紹介する予定です。

文化遺産そのものが、その本来的な場所として存在している奈良におかれた研究室としての認識をもとに、文化遺産の内実としての歴史資料の調査、実態把握と成果公表に今後つとめていきたいと考えています。

考古第二調査室（平城宮跡発掘調査部）

考古第二調査室は調査員4名からなり、洗浄、収蔵、復元を担当する整理作業員5名、実測図の作成やデータベース管理を担う派遣職員4名がこれを支援しています。ここでは発掘調査で出土した土器、土製品の整理、研究をおこなっています。平城宮跡の膨大な出土品は、古代の土器研究の最も基準となる資料です。

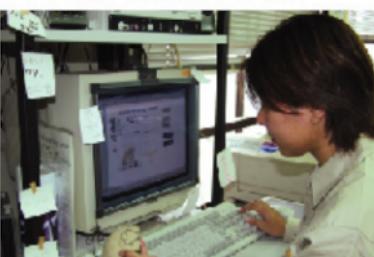
発掘現場から持ち帰られた土器・土製品は丁寧に洗われ、接合を検討します。そして、調査次数・出

土地点・出土年月日などのデータを書き込み、図面を作成します。人々の生活に密着した食器であり、商品でもあった土器の出土地点や帰属時期を調べ、その生産と消費のあり方を解明することで、奈良時代の歴史をひも解いていきます。



一般の人々にむけたプレゼンテーションとして、復元も欠かせない作業です。復元された土器は標本や展示資料として使われます。また、文字や絵の書かれた墨書き土器や施釉陶器といった注目すべき遺物について、現在データベース化を進めています。

このほか、国際遺跡研究室の唐三彩に関するプロジェクトにも協力しており、古代における施釉陶器についての調査・研究をすすめています。



編集 「奈文研ニュース」編集委員会
発行 奈良文化財研究所

R100

PRINTED WITH
SOY INK